

最終レポートでは評論・ルポ・エッセイを書いてもらいます。まずは企画をたてていきます。「タイトル」(短くわかりやすく)とその「要旨」(要旨は各 100 字以上)を 3 つ以上考えて書いて下さい。評価のポイントは「その新書買ってみたいか?」です。

タイトル:『ゲームは家でやろう』、要旨:「今や国内ゲーム市場の 5 割を占めるスマホゲーム、その影でキャラゲーと既存ゲームの再生産で糊口をしのぐ携帯型ゲーム……いつでもどこでもプレイングの時代に、今や見向きもされない家庭用ゲーム。そのよさを具体例を交えつつあえて主張し、ゲームという表現様式の可能性を追求する」

タイトル:『僕が政治家をあきらめた理由』、要旨「国会で寝られる、うまいものが食える、それなら政治家ならなりたいたいと思うのが世の常。でも真面目な政治家になりたいので今流行の政治塾に行こうと思ったら……。学生主催の政治系サークルからアヤシイ政治家塾まで、多様な政治家養成機関を調査し、政治家に「なるまで」の苦労を描く」

タイトル:『ふしぎな首相動静』、要旨「新聞の政治欄の隅っこに、現総理の動向が詳細に記されている。何時何分誰と会談とか、何時何分に誰とご飯とか、ときには何時に家で「静養」とか……。こうした首相動静の細かさは日本ならではのだというのが、そもそも何故こんなものを報道するのか? 素朴な疑問から、日本の政治文化ならではの不思議を解き明かす」

### 『EXILE 化するサッカー日本代表』

郊外型エンタメ消費の代表として挙げられるダンス・ボーカルユニットのエグザイルのビジネス手法とファン層を明らかにしたうえで、今日サッカー日本代表が置かれている社会的立場やファンのトライブとの相似点を見つけ、今後サッカー協会やスポンサーがとるであろう戦略とファンの態度の変容について論じる。

### 『エロ本がコンビニに居座り続ける理由』

成人向け雑誌の目指すところは、読者の性的欲求を喚起し、それを誌面上で満たすことにあると言ってもいい。ネットの発達で欲望と消費が点と点で結びつきやすくなった今日、それは性産業においても同じことが言えるはずだ。それでも成人向け雑誌はコンビニの棚から消えることはない。その理由を広告収入や購買者層、コンビニという売り場の持つ特異性などの分析によって解き明かし、成人向け雑誌を切り口とした出版文化論、消費文化論とする。

### 『カタログ文化の終焉 ～ファッション雑誌はカルチャー誌に転身できるか～』

かつてファッション雑誌はカタログ文化からその勢力を伸ばした。(『ホールアースカタログ』や『メイドインUSAカタログ』など)しかし、今日ではファッションカタログ的な閲覧文化は、ネットアプリ(ZOZOタウンが主催するWEARアプリ※など)にとって代われつつある。単にファッションアイテムを探したり購入したりしたい若者にとっては、有料のファッション雑誌を購入してページをめくる作業はともすると煩わしいことですらあるらしい(後輩情報)そうした状況でこれからのファッション雑誌がとるべき生き残り策を実際の例を挙げながら提言したい。最終的には悲観的タイトルを裏切りたい。

※そこではアイテムをクリックすることでそのアイテムを使用した別のコーディネート例に飛ぶことができたり、気に入ったアイテムをネット通販でそのまま買うことができる。

### タイトル:「造顔する女たち」

要旨:女性が化粧をすることは今に始まったことではないが、近年、化粧というよりは造顔と言うべき、顔のつくり込みがみられる。そして化粧をしていない自分の顔を受け入れることができずに化粧を落とせない、カラコンをはずせない、といった女性が出てくる。彼女た

ちをそこまで駆り立てたものは何なのか。そして、そこに潜む心の闇とは。

タイトル：「出版不況の時代」

要旨：「出版不況」といわれる近年であり、その原因の一つとして電子書籍の登場があるといわれている。しかし、自分の周囲では電子書籍を愛用している人はいない。実際その影響力とはどのくらいのものなのか。「出版不況」を招いている本当の原因とは何なのか。

タイトル：『こじらせ女子』が暴き出したもの」

要旨：AVライター雨宮まみさんのエッセイ『女子をこじらせて』が発売されて以来、その内容へ共感の声を挙げる女性や、カミングアウトする女性が出てきている。そしてそれがまた新しいコミュニティを海、「こじらせ女子」というカテゴリーが登場した。なぜ自意識やコンプレックスを表出するのか。そして「こじらせ女子」が暴き出す問題とは何か。

1：「書店の在り方」 要旨：「近年、ネット通販や電子書籍の普及により、本を買うためだけならば、必ずしも書店に行く必要がないという時代になりつつある。そんな中、書店の側からも生き残りをかけて様々な方策が講じられている。紀伊國屋書店の「ほんのまくら」フェア、函館に新たにオープンした蔦屋書店…。書店が生き残るには、「書店を訪れる」ということが1つのイベントであるということ伝えていかなければならないのである。書店の現状とそれを克服しようとする様々な施策を検討する。」

2：「ライトノベルの台頭？」 要旨：「書店に並ぶ文芸書や文庫を見ていると、ここ数年でキャラクターイラストがその表紙を飾るものが増えてきているように感じる。しかも、いわゆる『ライトノベル』とよばれているレーベルではなく、一般的な文庫においてその傾向が見られるように思われる。また、文庫の売り上げランキングを見ても多くライトノベルがそこに食い込んできている。このように本の嗜好が徐々にライトなものになってきているのにはどういう理由があるのか」

3：「キャラクタービジネスとしての三国志」 要旨：「古来より日本人の心をとらえて離さないものの一つに『三国志』がある。とくに、江戸時代に『三国志演義』が日本に伝来して以降はコンテンツとして多くの人々を楽しませてきた。そして現代では、その物語よりも、それぞれの登場人物をキャラクター化することに重きが置かれるようになってきている。他の歴史ものと違い、『三国志』がここまでコンテンツとして親しまれる理由は何か、それを検討する」

## 1:題【どうした J-POP】

歌番組では似たようなアイドルが似たような歌を歌っている(実際に声を出しているのかも分からないが)。インタビューなど公の場でミュージシャンは CD の売り上げ低下を嘆く。ダウンロードの時代にとって代わられた。というわけでもなく、国民的に愛される共通の歌というものは無くなってしまった。そこで、日本の J-POP(広義での)を 80 年代あたりから現在に至るまで考えたい。

## 2:題【最も健全で不健全なスポーツ、高校野球】

私の好きなスポーツはプロ野球で嫌いなスポーツは高校野球である。高校野球は健全である、健全であるに違いない、いや、健全でなければいけないといった風潮が蔓延っている。スポーツなのにスポーツ以外の部分にばかり目が行く高校野球の病的な部分を分析し、抽象化し、他の例を挙げつつ物語消費の批評を行いたい。

### 3:題【新宿ゴールデン街】

早大生たるもの、高田馬場で安酒に溺れるべきというほど、高田馬場で酒を飲むわけではないが酒はまあまあ飲む方である。そんな自分がいま一番酒を飲んでみたい場所というのが新宿ゴールデン街である。昭和日本の雰囲気漂わせるノスタルジックで、エキゾチックでありアンダーグラウンド感満載で、外国人観光客の中でも今アツイとされているこのスポットで飲み歩いてルポを書くというなんとも趣味と実益を兼ねた企画。高田馬場からほど近いこのディープなエリアに大学生を誘うために書こうと思います。

#### 1.

タイトル：「07:00-31:00」

要旨：〇月〇日一勤怠「07:00-31:00」。社畜（しゃ・ちく）一主に日本で、勤めている会社に飼い慣らされてしまい自分の意思と良心を放棄し奴隷（家畜）と化したサラリーマンのことを指す。日本人ならば誰もこの単語を耳にしたことあるだろう。「辞めちゃえばいいのに」と不思議に思ったことはあなたも何度かあるはずだ。彼らはなぜ「家畜」になったのか？その実情を匿名ですべて暴露する。

#### 2.

タイトル：「22時、高田馬場駅前ロータリーで。」

要旨：多数のサラリーマン、大学生がたむろっている高田馬場駅前ロータリー。22時を過ぎるとそこは校歌が響き、喧噪、吐瀉物であふれ、「戦場」と化す。そんな「カオスな戦場」にいる「戦士」たちの喜怒哀楽、本音にインタビュー形式で迫っていく。この1冊を読み終えた時、あなたは本物の「人」の面白さを知ることになるだろう。

#### 3.

タイトル：「仮面浪人」

要旨：仮面浪人という言葉聞いたことがあるだろうか。大学に通いながら別の大学の進学を目指して受験勉強を続けることだ。「ただ受験に失敗したからじゃない。」というのが彼らに共通することである。果たして彼らは何を思って勉強し続けているのだろうか。「仮面浪人」を決意している3人の波乱万丈な受験ストーリーを詳細に描いていく。

「キラキラネームの鍍金を剥がす」

今や社会問題にまでなったキラキラネーム。「読めない」「名前に適さない」と誰もが認識しているのに、親になるとなぜ子にキラキラネームを付けてしまうのか。日本人にとっての命名の意義を過去に学びながら、変質していく親心まで探究する。

「一方通行恋愛」

現実の女性でもなく、風俗でもなく、一方通行な「非現実」女性との恋愛に邁進するオタクたち。彼らは二次元に何を求めているのか。自分に自信がないから、傷つきたくないからとは言われるが、本当にそれだけなのか。純粋さ故の歪みを直視したとき、真っ当な恋愛をしてきたと胸を張れる人はいないだろう。

「オタクは金を使わない。」

基本無料のコンテンツにタダ乗りし続け、音楽が聴きたければ「歌ってみた」、ゲームはプレイ動画で十分。「オタクは金になる」を覆す新世代型オタク。コンテンツそのものには金を使わず、それのおこぼれ、「二次創作」に熱狂する異様な構造に迫る

タイトル:「**K-POP** と日本社会」、要旨「今や日本のメディアからは姿を消してしまった**K-POP**。韓国のアイドルが日本から姿を消してしまったのは本当に飽きられたから、なのか。そして今でも**K-POP**を指示し続け新大久保に通い詰める多くの少女達は何を思ってそこまで執着するのか。日韓の政治的関係、これからの**K-POP**の行く末を多くのファン、関係者への取材をもとに明らかにする。『文化は国境を超えられるのか』」

タイトル:「なぜ日本人はドラマを見なくなったか」、要旨「日本では1年に何本ものドラマが制作され、放映されている。しかし、視聴率の低迷は目をそらすことの出来ない事実だ。テレビをつければすぐにでも見られるドラマになぜ今の若者は興味を示さないのか。また、好視聴率ドラマの秘密、映画やスマートフォンとの関連性も考察しながら明らかにしていく。」

タイトル:「日本人と**Twitter**」、要旨「日本人にとってもはや最もポピュラーな**SNS**となった**Twitter**。世界の国々と比較しても日本人の**Twitter**利用率、つぶやき頻度は類をみない。何故日本では**Facebook**でも、**LINE**でもなく**Twitter**なのか。実際の利用者のインタビューも含め、現代社会の大きな謎に挑む。」

①タイトル:「『悪の教典』はなぜヒットしたのか」、要旨:「『悪の教典』『バトル・ロワイヤル』などに代表されるような残酷な設定・描写の物語を、なぜ観客は観たいと思ってしまうのだろうか。いくつかの作品例をもとにヒットの鍵を探る。」

②タイトル:「『アナ雪』戦略」、要旨「アナ雪、『アナと雪の女王』。ストーリーを聞いただけでは、姉妹の愛情劇のようにしか感じられなかった方もいるだろう。何故人々は『アナ雪』に魅了されたのか。公開前から公開後までの『アナと雪の女王』に関する「プロモーション戦略」に迫る。」

③タイトル:「スクールカーストの底辺から」、要旨:「近年ドラマや映画などで取り上げられ注目を集めた「スクールカースト」。そんなスクールカーストの底辺で生きている生徒たちの悩みや希望について迫りながら、閉鎖空間としての「教室」というものを考えていく。」

①タイトル:「海外が好む日本文学」要旨:「国内のみならず、海外でも好んで受容される日本文学には幾つの特徴がある。それは単に作品内部の面白さによるものではなく、もっと広範な、ひいては出版業界の国内外ネットワークをも巻き込むものだった。川端康成から始まり、三島由紀夫、安部公房を経由し、大江健三郎、村上春樹、多和田葉子に至るまで、日本文学の海外受容における実態を解き明かす。」

②タイトル:「これからの文芸雑誌」要旨:「決して需要が多いとは言えない文芸雑誌。ただでさえ斜陽産業と見なされている出版業界で、それでもなお文芸雑誌を作り続ける意義とは何

なのか？そしてこれからの文芸雑誌に求められる姿とは？現役の編集者へのインタビューを通して見えてくる文芸雑誌の未来像。」

③タイトル:「量産型女子大生を〈哲学〉する」要旨:「同じ髪型、同じ服装、同じメイク、同じポーズ。あらゆる面でワンパターン化し、個性が無さすぎると言われる女子大生がいる。彼女たちはなぜ同じ格好をするのか？現代社会と量産型女子大生を哲学的に接続させて浮き彫りになる、偶然では片付けられない真実。」

1「理想の普通」要旨:「服飾系専門学校生がよく買うブランド」のランキングをご存知だろうか。このランキングを掲載したサイトには10000を越えるイイね！がつくほど注目が集まった。しかし、一位に輝いたのは何とユニクロだった。流行のノームコアや読モ文化など、現代の人々が”普通”を求めるのはなぜか。そこには進化し続けるSNSの存在も見えてくる。現役の大学生・読モへのインタビューを通して、アパレル業界の実態からSNS、そして現代の人々の求める理想像を読み解いていく。

2「あそぶんこう、あそびましょう」要旨:携帯、パソコン、居眠り。努力の末やっと入学することが叶った憧れの大学の講義中にもかかわらず、多くの学生はこの三つに分類される。しかし、彼ら全員が所謂意識低い系かということとそういう訳でもないようだ。なぜ学生は授業を受けないのか。現役の大学生へのインタビューを元に、彼らの大学生活、そして彼らの想いに迫る。

3「晩婚・少子化の時代の若年出産」要旨:先日16歳のモデルが妊娠、結婚を発表し話題になった。私の幼なじみにもまた、高校生の時妊娠、結婚をした女性がいる。しかし10代の人工中絶件数は年々増加している一方、出産件数は年々減っている。そのような中でなぜ彼女たちは母親になる人生を選択するのか。インタビューを元に若年出産の現状を描く。

①タイトル:「レズビアンメディア露出」、要旨:「最近、体は男性として生まれながら心の生は女性である人々が自分の性についてカミングアウトしメディア露出するのを多くみかける。しかし、体は女性で心の性は男性であるレズビアンと呼ばれる人々のメディア露出をみたことはあるだろうか？かなり少ないであろう。そこにはどうして違いがうまれてしまうのか、考えていきたい。」

②タイトル:「夢を金にかえる人々」、要旨:「アイドル戦国時代という言葉聞いたことがあるだろうか？現在、男女問わず様々なアイドルが出現し人気を博している。この「アイドル」というのを多くプロデュースすることで商売としている人々がいる。今回はその人々にスポットをあててみる。」

③タイトル:「いまだ存在する黒ギャル」、要旨:「こぎやる・やまんばなど若者の間で世代をかえて流行するギャルとよばれる女性達。彼女達は派手な見た目となることで自分らしさを表現している。現在もいまだに根強く残るギャル文化であるが、最近では自己表現であったはずのギャルの格好を商業として扱うものが増えてきた。ネイルを広告手段とする事例もあるほどだ。変わりつつあるギャルの姿というものを探していきたい。」

①「ゾンビ映画では何故転ぶのか」、要旨:ゾンビ映画にはお決まりのシーンがたくさんある。襲われたときに転んだり車のエンジンがかからない、おちゃらけたキャラは食べられてしまうなどなどクリシェ(お決まり)の連続である。ゾンビ映画の新たな見方を解説する。

②「最近の日本語的な感じ。」要旨:〇〇的、□□な感じ、△△っぽい。現代の日本語はニュアンスで溢れている。なぜそのような言葉が多く使われるのかをひも解く。ニュアンス社会はこれからどうなっていくのか、SNSを引き合いに展望を見る。

③「もうすぐ絶滅するというフィルムについて」要旨：フィルムカメラ、ひと世代前までは主流だったものがデジタルに取って代われ今や過去のモノ。フィルムは生産中止に追いやられ数十年後には全ての在庫がなくなると言われている。アナログの良さについて改めて考えてみようではないか。

### 進撃の巨人はなぜ売れたのか～日常系からの脱却～

近年ベストセラー入りやアニメ化、映画化などをなしとげ、人気絶好調の「進撃の巨人」だが、そのヒットの裏には東日本大震災という日本全体を揺るがす事件があった。「東京喰種」や「寄生獣」、SFの人気回復、そして「永遠の0」などを関連づけながら、震災後の日本のエンターテインメントを論じていく。

### 画面の奥のアイドルたち

**AKB48** やももいろクローバーZ といったアイドルがますます人気を博し、「アイドル戦国時代」といわれる今日この頃、しかし一方で異なるタイプのアイドルが支持を集めている。それがいわゆる「二次元アイドル」である。実際にこの世に存在するわけではなく、また「会いに行けない」アイドルである彼女らは、それでもフィクションの中だけで存在するわけではない。「二次元アイドル」の存在は、アイドル戦国時代をどのように動かしたか。

### 柏の葉キャンパスの未来像

千葉県柏市、つくばエクスプレス線の駅である柏の葉キャンパスとその周辺は、三井グループによる開発が行われる。私の祖父母が住むこの地域は、母が住む頃はいかにもという田園地域で下水もなかったのが、今はエネルギーや外観を統一した近未来都市へと変貌しつつあるのだ。街全てを管理するとはどのようなことなのか。そして三井グループと柏の葉キャンパスが提示する、世界の未来像は、私たちをどう変えていくのか。

### 迷走するライトノベル業界

昨今のアニメブームはますます盛り上がりを見せている。アニメの原作として無視することが出来ないライトノベルは、今、様子がおかしい。新人賞大賞作家が伸び悩み、何処にでもある「萌え」小説が求められている現状を、文章の資本主義化と共に追い求めていく。

### デニーズでは今、何が起きているのか？

ドリンクバーを廃止し、健康志向の商品販売へと切り替え、メインターゲットを高年層にしたデニーズ。しかし、11月18日から始まったパンケーキ食べ放題、スタンダードの徹底化など、リピーターと若年層重視の戦略をも打ち出したデニーズでは、今、どのような事が起きているのか。その最前線を解明していく。

### 筋肉は漫画に不必要なのか？

「北斗の拳」「魁！男塾」などジャンプで一世を風靡した格闘漫画は、今、ゆっくりと消滅しつつある。筋肉と昔ながらの演出は鳴りを潜め、現代の少年漫画は、普通の少年を主軸に押しつつある。時代が肉体系漫画を窓際に追いやっているのか、それとも漫画を求めている人間の感覚が変わり始めているのか、少年誌を例に取りながら、漫画の興亡について打ち出し

ていく。

タイトル：「イチロー分析」

要旨：1. 野球ファンはもちろん、野球ファンでなくとも日本国民なら誰もが知っている野球界のスーパースター、イチロー選手。イチロー選手は単なる有名な野球選手ではない。私たちが彼を見る眼差しには“憧れ”や“尊敬”が伴う。私たちはなぜイチロー選手に惹かれるのか。彼の言動を分析していく。

2. イチロー選手が「上司にしたい男性」に選ばれるのはなぜなのか？一方でファンであればあるほど「上司にはしたくない」との声も多い。ファンとファン以外で実は異なっている「イチロー像」、その違いはどこから生ずるのかについて解説する。

3. イチロー選手は過去の人ではなく、現在もメジャーリーグで活躍している。それは彼もまた一人の人間として現在進行形で苦悩したり何かを選択したりしながら今を生きているということである。彼の生き方から学べるものは何か。私たちの日常生活にも適用できるヒントを探していく。

タイトル：「岸本斉史の漫画忍道」、要旨：「今年 11 月、集英社『週刊少年ジャンプ』での 1 年間の連載を終えた『NARUTO-ナルト-』。読者アンケートの結果が不調だと掲載順が後ろになったり、中には 10 週ほどで打ち切りになったりと、連載を続けることが厳しい世界で有名な『週刊少年ジャンプ』であるが、そこで岸本斉史はどうやって 15 年間という長期連載を成し遂げたのか。作品分析はもちろんのこと、歴代担当編集者、ひいては著者本人にも取材し、『NARUTO-ナルト-』連載 15 年間を描く。」

タイトル：「リアル図書館戦争」、要旨：『フリーター、家を買う。』や『三匹のおっさん』など多くのヒット作を生み出した小説家有川浩の『図書館戦争』シリーズは、検閲が横行する社会で本を守ろうとする「図書隊」に所属する主人公たちの物語であるが、その「図書館」と現実の「図書館」は一体どれほど一致するのだろうか。「図書館の自由に関する宣言」は我々の表現の自由や知る権利を守ってくれるのだろうか、「秘密保護法」の問題がある現代だからこそ追及していく。」

タイトル：「10 年に 1 度のチャンス、LGBT の未来を変える」、要旨：「今、保健体育の教科書の記載が、LGBT 問題について考える業界では大きな話題となっている。『思春期には皆異性を好きになる』と書き、LGBT の子どもの不安を煽るのみならず、教科書でありながら差別を推奨するような記載である。このたび、10 年に 1 度の教科書改訂に向けて署名運動が起こっている。現代の日本の LGBT 問題に言及しながら、教科書の内容改訂への数多くの希望の声を紹介していく。」

1、「SMA P・木村拓也はジャニーズか」

国民的アイドル SMA P。その中でも一際スターと評されるのは木村拓哉（通称・キムタク）だ。木村拓哉は個人でも幅広く活動し、特に映像関係で活躍を続ける。これは他のジャニーズにもいえることだが、キムタクが決定的に違う点がある。主題歌を SMA P が歌わないことだ。ジャニーズの最も大きな市場とも言える、出演した作品の主題歌起用。キムタクのあり方からジャニーズと社会のあり方を見る。

2、地下鉄が巡る都市、バスが走る地方

地下鉄が発展している都市は地上すらも発展している。逆に地を制したからこそ、地中を攻めるとも考えられる。主要交通網をバスに頼る地方と地下鉄が支配する都市の違いを見てみると発展の過程の違いがわかる。次にバスに乗る時にどんな景色があなたの目に映りますか。

### 3、狭間の大学野球

夏の風物詩にも数えられる甲子園。いまだに日本の人気スポーツ・プロ野球。その狭間に揺れ動く、大学野球。高校時代の悔しさ、栄光。プロへの期待を含んだ選手たちがプレーするのは神宮球場。六大学野球の歴史は長いが、人気はますます。それは野球にとどまらず、他のスポーツにおいてもその通りだ。だが、**2020年東京オリンピック・パラリンピック**の中心はまさに大学生世代。**2020年**を見るためにいまの大学生を見る一冊に。

タイトル：「**22歳の恋愛学**」、要旨：「先日、朝日新聞の記事で『交際中の異性なし』未婚男性6割・女性5割 過去最多」というニュースがあった。現代の日本の男女は、本当に交際や結婚を望んでいないのだろうか。10代、20代、30代の未婚男女それぞれにアンケート調査を実施し量的データを集めた上で、実際にインタビューを行い、そのデータ結果の内側にも焦点をあて考察をすることで問いを明らかにする」／

タイトル：「もし野球部の女子マネージャーがコトラーの『Marketing 3.0』を読んだら」、要旨：「女子マネージャーである『わたし』はドラッグの『マネジメント』を読んでも甲子園に行けるわけがないと思った。米経営学者のフィリップ・コトラーの『Marketing 3.0』はソーシャルメディアの普及を捉えて、消費者の心からの共感を得られるような価値の追求を提唱している。甲子園に行けるかどうかはさておき、本物の野球部マネージャーがコトラーの『Marketing 3.0』を読んだら……。世界は少しだけ違って見えるかもしれない」／

タイトル：「WA・BI・SA・BI」、要旨：「『美しき日本の残像』の著者はアメリカ人。アレックス・カー氏は、幼いときから日本の文化に惹かれ、自ら日本の古民家を買って再生させた。日本の伝統文化に秘められた“美”を独自の視点から考えている。当たり前になってしまった自国の“美”に無自覚で、ビルなど最先端の開発を進める日本の今を彼は意見する。古民家、町屋を保存や再生をする活動を行う中で、日本人とは違う見方・考え方を取材していく」

### 進学校の真実

東京大学を初めとする大学への進学実績が上位のいわゆる「進学校」に入れば将来は安泰だという考え方は根強い。しかし、それはどの程度真実なのだろうか。例えば数字だけ見ても、確かに一流国立大学への突出した合格率には目を引かれるが、他方で生徒数から考えるとそこには含まれていない人も多く存在するのも確かなはずである。加えて、少なくとも大学受験に関しては「成功」した人達に関しても、その後の人生が上手くいっているのかということに関しては何ら保証されていない。大学受験における成功はあくまで途中経過である。また、進学校に関して論じた本はしばしば存在するが、それらの多くは校長先生へのインタビューなど、外部からアクセスできる範囲の取材に留まっており、より内部の実態に踏み込んだ取材は少ないように感じる。本書では実際に都内有数の進学校の一つを卒業した筆者が自身の経験に照らし合わせながら進学校の実像に迫る。

### アニメファンの変容

ドラマ『電車男』に代表されるように、少し前までは美少女アニメが好きな大人はある種の異質で気持ち悪い存在として捉えられていた。こうした趣味は進んで表に公言するのは憚られるものだった。しかし、最近では多くのタレントが「美少女アニメ」に分類されるような作品のファンであることを公言したり、私は大学生であるが、大学でも学生の多くが自己紹介で「趣味はアニメを観ること」と発言するなど、「アニメを観る」ということが、気持ち悪いどころか比較的ポジティブなイメージに変わっているのではないかと感じられる。こうし



たアニメを巡るイメージの変容の背景には何があるのかということについて考察してみたい。

### 多様化する将棋棋士

将棋棋士というのを将棋を指すことに専念して、勝負の世界でお金を稼ぐ職業というイメージを持っている人が多いのではないだろうか。しかし、今日ではニュースキャスターをやったり、ニコニコ動画に出演したり、棋士間で自主的にファンとの交流会を企画する等、将棋以外の活動にも力を入れている棋士が多い。また、将棋棋士には「大盤解説」というファンに向けて将棋の解説をする仕事もあるが、ここでも観客を楽しませるような話術が求められる。こうした背景には長らく将棋界の最大のスポンサーであった新聞社の衰退等があるが、それはともかく、一将棋ファンとしては将棋棋士が将棋だけであればよいという時代は終わったのだという印象を強く感じている。そして、こうした将棋界の変化は現在の日本社会が被っている変化の縮図としても考えることができるのではないだろうか。大きく変容する今日の日本社会でどう生きるかというヒントを、将棋棋士から探してみたい。

タイトル【授業なう】要旨：Twitter や LINE、Facebook など代表とする SNS に囚われながら生きる現代の大学生。形骸化する大学教育、コミュニケーションの複雑化、増加する大卒ニートなど現代の大学生の生態と彼らを取り巻く環境をよりリアルに描くことで、「日本の大学生」を考察する。

タイトル【日本のベントー】要旨：ベントーとは、「弁当」のこと。日本に生きる私たちにとっては、学校でもオフィスでも弁当は当たり前前の存在であるが、海外ではいま日本製の弁当箱が人気という。弁当人口が多いうえに、その歴史も長い国ならではの弁当文化を知ること、毎日のランチが少しだけ特別なものに感じられるかも…？

タイトル【知恵袋の中身】要旨：以前、『生協の白石さん』という本が話題になったことを覚えているだろうか。大学生協に寄せられたコメントや要望に、生協職員の白石さんが丁寧に答えていく様子を描いた本である。本書はそれの Yahoo!知恵袋版であると言って差し支えない。読売新聞のコラム「人生相談」よろしく、世の中にはこんなことで悩む人もいるのだなあ、自身の悩みも吹っ飛んでしまえたら幸いである。

#### ・「記憶/記録・物語/歴史」

スマホゲーム「Final Fantasy Record Keeper」における記憶と記録・物語と歴史の在り方について、私たちの生きるこの世界に何を示唆していると読むことができるのか。「物語を記憶する」「歴史を記録する」という言説にどのような差がある/ないのか。

#### ・「メディアミックスと二次創作」

近頃、様々な作品が「メディアミックス」と称して実写映画化・ドラマ化・アニメ化・・・とメディアを越えた作品展開をするのが当たり前になってきた。しかし、漫画の実写映画化はファンからの批判が付き物である。では、そのなにが悪いのか？二次創作との比較でその理由を考える。

#### ・「何故、今、『寄生獣』なのか」

2014年、漫画「寄生獣」がアニメ化・実写化され話題となっているが、その原作は1995年—9年も前に完結したものである。何故9年の時を越えてこの作品が再びクローズアップされなければならないのだろうか。そこには「寄生」という概念により親密になった現代の姿が

浮かび上がる。

「揺れる邪馬台国」かつて日本に女王「卑弥呼」が治めた「邪馬台国」という国があったという。しかしながらその所在地は未だに明らかになっていない。「九州説」と「畿内説」の2大有力説を比較し、何が邪馬台国の所在地を不明にしているのかに焦点を絞って述べていく。

### 「Web漫画の人気の謎」

インターネットが全国的に普及した現代では従来の紙媒体を用いた漫画だけでなくネット上に公開されている「Web漫画」が人気を集めている。紙という媒体にとらわれない表現の仕方や、打ち切りの心配がないからこそできるよく練られた構成。Web漫画の人気について考察していく。

### 「大学生活のあり方」

人生の夏休みとも揶揄される大学生活。元来は学問の場として機能していた大学は、大学全入時代に入った今、その機能が変化しているのではないだろうか。実際に大学生にインタビューをし、大学生の実態に迫り、大学うという場を改めて検討してみたいと思う。

### 「‘愛’は‘格差’に勝てるのか？」

デキる女ほどデキない男に惹かれる不思議な心理…。女性の高学歴化、社会進出が進んだ現代において、デキない男を愛してしまった高学歴・キャリアウーマンのデキる女は、彼を人生の伴侶として選び取る決断を下すのか、否か…。著者の実体験も交えながら、彼らの恋の行方を追う。

### 「1か月で店長になる方法」

25歳、無職。高校卒業後アルバイトを転々としていた男性がある飲食チェーン店に社員として採用された。そしてその1か月後、彼は一店舗の全責任を請け負う店長という任務を与えられていた…。わずか1カ月の間に一体彼に何が起こったのか。そしてその裏に隠された飲食チェーン店の闇とは…？

### 「宗教人口2億人」

日本の人口は1億とちょっと。対して日本の宗教人口は2億人。日本人が‘信じている’モノとは一体何なのか？日本人の不思議な宗教観を追いながら、日本の宗教文化に隠された真実や矛盾を読み解いていく。そこから明らかにある宗教大国の本当の姿とは…？

タイトル：「限界集落は本当に限界を迎えているのか」

要旨：集落の人口の半数以上が65歳以上の高齢者である地域のことを限界集落という。長野大学の野晃氏が提唱する概念であり、野氏は限界集落の行きつく先には「集落の消滅」があると主張している。しかし実際に限界集落をたずねてみると、そこには消滅など微塵も感じさせない豊かな暮らしと活気あふれる高齢者たちの笑顔があった。限界集落の真の姿に迫る。

タイトル：「カネとセックス」

要旨：「あなたの悩み、聞かせてください。」無料で人の愚痴を聞く、愚痴聞き屋。彼らのもとに集まる人たちの悩みのほとんどがカネとセックスについてだという。赤の他人にだけ打ち明けられるカネとセックスの悩み。日常生活では満たされない現代人の心の闇を解き明か

す。

タイトル：「私が代わりに死にますから」

要旨：原因不明の難病と闘う子どもたち。「どうしてうちの子が…」闘病中の彼らだけでなく、その家族も同様に辛い現実には苦しみもがき耐え忍んでいるのだ。私が代わりに死にたいとまで口走ってしまうほどに追い詰められた母と子の壮絶な闘病生活を描く。

タイトル『池上彰の憲法入門』

要旨：私たちは日本の憲法についてどれくらい知っているだろうか。例えば、憲法の条文に「国民は憲法を守らなければならない」とは一言も書かれていないことを知っているだろうか。憲法解釈、改憲など、昨今の憲法にまつわる問題に必要な知識を池上彰氏と読み解く。

タイトル『物を売るバカ 売れない時代の新しい商品の売り方』

要旨：今日、「安くて品質が良い」だけでは物は売れない。ライバルに比べ数倍を売り上げる人々の決め手は、「物」ではなく「物語」を売ることだった。ビール会社、新幹線の車内販売…他とは違う「物語」の売り手たちに学ぶ秘訣とは。

タイトル『偏差値・知名度ではわからない 就職に強い大学・学部』

要旨：学部・学歴・男女の差による就職差別。建前上では存在しないはずだが実際は根深い問題の数々を、経営・就職コンサルタントの著者が検証する。大学選び、企業選びに失敗しないためにはどうすれば良いか？様々な現場の事例とデータに裏付く就活の極意。

『熱狂なきファシズム』

安倍政権による独裁、日本国民の民主主義への失望や虚無感は否めない。12月に再選挙が行われる。私たちは正しい判断を下すことができるのだろうか。我々はヴァイマル帝国期におけるヒトラーの台頭に相当する政治的状況におちいてないだろうか。日本のファシズムについてのひっそりと忍び寄る「日本流」ファシズムに対抗するために、日本国民としての政治的自覚を取り戻すために、必読の一冊。

『それをお金で買いますか』

‘What is the right thing to do?’ で一世を風靡したマイケル・サンデルの第二の名著。タイでの代理母出産の問題は記憶に遠くはないだろう。資本主義を崇拝する現代社会の中で、資本主義から何が守れるだろうか。命、時間、人権、権利などが資本主義の中に浸食されていく中で、「市場の原理」を絶対の原理としないために私たちはどのような哲学、倫理、思想を確立すべきであろうか。

『一般意思 2.0』

民主主義の新たな可能性を考える。高度に発達したインターネットの時代に可能な民主主義とは。インターネットのアーキテクチャーがもたらす新たなアカウントビリティーと市民のチェック&バランスシステム。ルソーの「一般意思」を現代のグーグルの時代に再解釈し、モノとして存在する意思がもたらす間接民主制の可能性を問う。

【1】タイトル:「インターネットカジノの実体」、要旨:『お兄さん今日はキャバクラですか？ カジノですか？』歌舞伎町のキャッチが誘うカジノとは一体何なのか。日本でのカジノ合法化の是非が問われている現在、グレーゾーンや摘発店も出ているインターネットカジノの実

体を潜入による取材から探る。」

**【2】** タイトル:「不倫のしかた」、要旨:『『不倫は文化です。』かの人が言ったセリフに多くの人が批判をしつつも、浮気をしてしまう男女は後を絶たない。この本は、どうせやるなら巧くやれ!をモットーに書かれている。実際に現在進行形で浮気をしている男女や修羅場を経験した先人たちの体験談を取材し、『ばれない浮気のしかた』を明らかにする。」

**【3】** タイトル:「あるニートの一日」、要旨:「15歳から39歳の若年層でニートは約65万人いるとされている。彼らを取り巻く環境は様々であり、一括りにはできないそれぞれの人生がある。年代別に多数のニートを取材し、日常をどのようにして過ごし、何を考えているのかをリアルに追求した。ニートからの視点に立ち、ニートを生む社会の構造を紐解いていく。」

#### 企画①「こじらせ男子はなぜいないのか」

自分に自信がなく、恋愛に臆病な「こじらせ女子」が今、話題だ。しかし、「こじらせ」ているのはどうして女子だけなのだろう? 自分に自信がなく、恋愛に臆病な男子はどこに行ってしまったのか? 「リア充」の影に隠れているのか、それとも「キモイ」男子に包括されているのか。人々にまわりつく「ジャンル」「レッテル」から、ジェンダーの構造を読み解く。

#### 企画②「コドモと流行 —マリオ・ポケモン・妖怪ウォッチ—」

はじめて社会に「ポケモン」が登場したのはもう20年近く前のこと。ポケモンで遊んで育った世代は大人になり、彼らをターゲットにしたリメイク版のゲームが巷をにぎわせている。一方、今新しく話題なのが「妖怪ウォッチ」。ゲーム、アニメ、映画とジャンルをまたいで、社会現象を巻き起こしている。そして、こういったゲーム発信の流行の元祖である「スーパーマリオ」。所得水準、ジェンダー、情報化…3つの社会現象から、それぞれの時代の特徴が見えてくる。

#### 企画③「クールジャパンの行方」

東京オリンピックの決定により、日本の文化や技術を「再評価」する動きが起こり、あらゆるメディアが日本にまつわる特集を組んでいる。しかし、そういった特集がほとんど触れないながらも、確かな観光資源となっているのが、「クールジャパン」といってプロモーションされている漫画やアニメ、ハラジュクのカルチャーだ。需要に比べて、日本国内での認知・供給は遅れている。この意識のギャップはどこからくるのか、日本人はどうして「クールジャパン」を受け入れられないのか。日本はどこに向かっていくべきなのか?

①「戦後日本の現代アート」便器にサインをするばかりが現代アートではない。戦後、国内政府や占領国アメリカという権力との戦いの中で華開いた現代アートもあった。日本の戦後アヴァンギャルド芸術運動とはどのようなものだったのか。具体的な作家を手掛りに探求したい。

②「住まうとは何か」3. 1 1によって甚大な被害を受けた東北地方。しかし或る地区では、昭和三陸大津波の反省が掘られた石碑に従い低地に住居を建てていなかったため、犠牲者が出なかったという。大型地震が予想される関東圏にとって、これは人ごとではない。3. 1 1以後、「住まう」とは何か。

タイトル:「渋谷スクランブル交差点に集まりたがる若者たち」

要旨:W杯やハロウィンなど様々なイベントが行われるごとに、思い思いの格好で渋谷のスクランブル交差点に現れる若者たち。その規模は今や警察機動隊まで配置されるほどまでに膨れ上がっている。それなのに、当の彼らはそこまでイベントの内容に興味はなさそうだ。一体どうして若者は渋谷に集まるのか？インタビューを元に、そうした身近な疑問を解決する。

タイトル:「あなたと一緒に、食べること——映画『小野寺の弟 小野寺の姉』評」

要旨:2014年10月に映画化された『小野寺の弟 小野寺の姉』をもとに、「誰かと一緒に食事をとること」の意義について考察する。普段何気無く欠かさず行っている「食べる」という行為は、実は人間の文化に深く関わっているものであった。家族愛を描いた映画から、個人が持つ食へのありがたみや愛を読み解く。

タイトル:「増える音楽フェス、そのゆくえ」

要旨:CDが売れないと言われる時代のなか、音楽フェスが増えている。都市型フェスや地方型フェス、更には音楽に留まらないフェスまで。また、大学の学園祭も音楽フェス化してきている。以上のように、転換期を迎えている音楽業界の、今とこれからを考察する。

①タイトル ケバい小学生～娘さんおいくつですか？～

要旨 バッチリメイクを決めオシャレに気を使い、ファッション雑誌を読みふける女子小学生。いわゆるJSと呼ばれ、突如として多くのメディアに取り上げられるようになった彼女たちだが、今の小学生にいったい何が起きているのか。メディアの影響や親の考え方の変化を探り、教育的な視点からもJSを探っていく。

②タイトル 女子アナは清純か。

要旨 日本テレビアナウンサーに内定していた女子大生が、ホステスをしていたとの理由で内定を取り消されたニュースは記憶に新しいだろう。日本テレビは、内定取消の理由として、「アナウンサーには高度の清廉性が求められる」などと言っているが、果たして視聴者たちは現在テレビで活躍している女子アナ達に「高度の清廉性」を認め、もしくは求めているのだろうか。

③タイトル オジサンの魅力

要旨 西島秀俊、竹野内豊、堺雅人、、、。最近、40歳前後のいわゆるアラフォー男子の人気をとまらない。女性ファンの層は幅広く、10代から中高年までである。ここまでオジサンが支持される理由は何なのか。オジサンの魅力に迫る。

○『右の味、抹茶』

どこへ行っても人気の「抹茶味」。甘くて、苦くて、ちょっと大人な「抹茶味」こそ、日本の生み出した至高の味……だが、「抹茶味」がこれほどまでに世間に氾濫し出したのは、最近のことである。なぜ、抹茶は多くの日本人の心を射止めるようになったのか。知らず知らず右傾化してきた、日本人のスイーツ論を探っていく。

○『書店に行くとやたらタイトルの長い本が目立つが、それはここ最近のことですよ』オリコンによる 2014 年上半期の本売上ランキングの 1 位は『人生はニャンとかなる！－明日に幸福をまねく 68 の方法』、2 位は『長生きしたけりゃふくらはぎをもみなさい』。2013 年の年間売上では、村上春樹の新刊に続いて、2 位に『医者に殺されない 47 の心得』がランクインした。長タイトルのビジネス本が好調なのはなぜか。その傾向を探っていく。

○『なぜ新聞に小説は載っているのか』

新聞には毎日 800 字程度の小説が連載されているが、新聞によってはその閲読率は 2% を切っているという。報道記事だけが載っていれば十分、小説は本になってから読めばいい、といった読者の声があるなか、なぜ小説は新聞に掲載され続けるのか。その背景には、新聞連載というスタイルが生み出してきた独自の「小説文法」があった。

タイトル：「消費される少女たち」

要旨：Twitter や tumbler などの SNS ツールが普及する中でそこに自身の顔や身体を晒す一般の女性たちがいる。彼女たちはなぜ一般人というそれを必要とされない立場にしながらそういった行動をとるのか。コンテンツ化され消費される女性の性という観点から彼女たちの実態に迫る。

タイトル：「アンダーグラウンドに生きる女性たち」

要旨：「ガールズバーやキャバクラ、果てはファッションヘルスやソープまで現代には女性にしか出来ない仕事の様々ある。そこで働く女性たちはなぜおそらく一般的にいいイメージを持たれないであろうその職業を選んだのだろうか。また、それらの職業の線引きはどこにあるのか。ガールズバーで働く三人の女性とホテルヘルスで働く一人の女性のインタビューを元にアンダーグラウンドな世界の今を探る。

タイトル：「AV 女優・春原未来」

要旨：「AV 女優春原未来。彼女は多くの AV 女優がその職業に就いた理由としてエッチが好きなことや家庭環境を挙げるのに対しマズローの欲求五段階説を持ち出す。AV 女優の中でも特異な存在であろうそんな彼女が考える AV の在り方とはどのようなものか。『あの娘のドキュメント－AV 女優春原未来のすべて－』という彼女の出演作を題材に彼女の理想に迫る。

タイトル：「みなとみらい世代」、要旨：「今や、みなとみらいは何の変哲もない地方都市のうちの一つに成り下がった。かつての横浜のアーバンなイメージは微塵もない。なぜこのように変化したか。本書では 1993 年の横浜ランドマークタワー完成以降の時代を「みなとみらい」と定義し、93 年生まれである著者の視点からこれまでの、そしてこれからの「みなとみらい」を哲学する。」

タイトル：「教養と承認欲求」、要旨：「昨今、「好きなことで生きていく」ことを夢見て、動画をネット上に投稿するワナビ－小学生が後を絶たない。しかしそれが本当に「好きなことで生きていく」ことにつながるのだろうか。本書では音楽、映像、ダンスなどといった創作活動が教養、承認欲求とどういった関係があるかを考察していく。」

タイトル：「再考 若者論」、要旨：「都内福祉科高校を一留し、卒業後は北海道の牧場に就職。そして現在は不動産会社で営業職についている 22 歳女性 H。多くの者が歩むであろう道とは異なる経路を辿ってきた若者へのインタビューを通して、いわゆる最近の「若者論」を再考し、その実態に迫る。」

・タイトル『群馬県の進撃が止まらない』要旨：富岡製糸場が世界文化遺産に登録され、ゆ

るキャラグランプリではぐんまちゃんがグランプリに選ばれ、群馬県を題材にした漫画がブレイクし、群馬県が日本を制圧するというスマホアプリまでが作られる。今、群馬県に何が起きているのか。群馬県の魅力とは。

・タイトル『日本にリーダーは要らない』要旨：長年に渡り強烈なリーダーシップが求められながらもついで日本に現れることのないリーダー。しかしそれでも日本という国は回っている。もしかして、そもそもこの国にリーダーなんて必要無かったのではないだろうか。リーダーが居なくても問題ない日本の組織のあり方を分析する。

・タイトル『人は何故クジを引くのか』要旨：神社でのおみくじや宝くじにはじまり、ビックリマンチョコやプロ野球チップスのオマケ付きお菓子、近年ではソーシャルゲームなど、とにかく日本人というものはクジを引くのが好きなようだ。一体クジの何が大衆の心を掴んで離さないのか。時には人を破滅にすら追い込む、クジ引きの悪魔的魅力に迫る。

タイトル：日本における権力による報道操作、要旨：2001年のNHK教育テレビで放送された「戦争をどう裁くか」という元従軍慰安婦による証言などを盛り込んだ番組の内容が、政治家の圧力で大きく改変されていたことが2005年番組チーフプロデューサーの告発で明らかになった。この事件は、「報道機関は権力を監視している」と信じる一般の人々に大きな衝撃を与えた。ここでは報道機関と権力の関係の在り方を再考していく。/タイトル：無菌の代償、要旨：ここ20~30年の間に、花粉・食品など何らかのものに対してアレルギーを持つ人が激増している。その原因は様々挙げられるが、衝撃的なのが日本が「あまりにきれいすぎる」ということだ。幼少時から清潔な環境で育つことによって抗体が作られないからだという。「無菌」「きれい」であることの思わぬ弊害をここに論じたい。/タイトル：「一発屋」とよばれて、要旨：音楽界には、数年に一度「一発屋」が現れる。一発屋とは、ある一曲だけ爆発的にヒットするが、それ以降は鳴かず飛ばずなアーティストのことを指す。しかし、一発屋のアーティストでも、ヒット曲だけで活動をやめることはなく、その後も細々と営んでいる場合が多い。ここでは数年前のあのアーティストに着目し、活動をずっと支えるファンの様子も交えつつ、彼らが目新しいものにすぐ飛びつく大量消費社会とどう向き合っているのか探る。

【例1】タイトル：「草食式据え膳返し」、要旨『「据え膳食わぬは』というありがた迷惑な教えがある。それは本当に女性が据えたものなのか。男性社会から無理に据えつけられたお膳なのではないのか。なら食べたくない。っていうか女性を食べる物扱いなんて。あらゆる誘惑をはねのけ貞操を守り抜こうとする21世紀の『竹取物語』。5人の貴公子たちはなぜ童貞のままなのか』／【例2】タイトル：「腐女子的中華従妹」、要旨：「1年に少なくとも1度は中国大陆へ親戚に会いに行く。『名探偵コナン』の怪盗キッド、『銀魂』の沖田総悟、『Free!』の葉月渚。いつしか従妹は腐女子になっていた。コンテンツばかりでなく日本から腐女子という概念も輸入されたとき、海の向こうでどのように覚醒するのか。巻末に中華腐女子的座談会を付す」／【例3】タイトル：「早稲田大学のトイレづくり」、要旨：「早稲田大学の建物はキャンパス企画部 企画・建設課によって造られている。各大学はもちろん、どんな施設に行っても必ずトイレをチェックしてしまう筆者により、早稲田大学のトイレがどのようにして造られ、今後どのように展開していくのか、趣味が高じてとうとう同課に直接インタビューを試みてしまった。これを読めば、トイレにも雨水から水道水までであることがわかる」

「オリンピックっておいしいの？」

①2020年来たるオリンピック。今回のオリンピックは東日本大震災の影響と相まって、賛否両論を集めた。そんな中で東京での開催が決まり、湧く日本ではあるが、果たして日本で開

催すことのメリットはなんなのか。そもそも私たちに「おもてなし」精神は潜在しているものなのか。本書で説明していこう。

②2020 東京オリンピックまで、残り 7 年を切った。伝統ある国立競技場も新国立競技場になるべく工事が進められている。しかし、やることは山ほどある。選手村の建築、鉄道の整備、宿泊の充実、通訳案内士の増加...挙げればキリがない。そして私たちも「おもてなしマインド」を準備をしなければ、本当にオリンピックなんて開催できないであろう。

③2020 年のオリンピックが東京で開催されることもあって、オリンピックが他人事ではなくなった国民も多いだろう。

では、どのようにしてオリンピックを「ジブン事」にすればいいのか。

ボランティアなど方法は多数ある。オリンピックをジブン事にして、二度と味わえないオリンピックを楽しもう！

タイトル：「焼き芋屋はなぜ潰れないのか」

要旨：冬になると、ふんわり甘い香りとともに、どこからか懐かしい声がやってくる。しかし、彼らの売る焼き芋はべらぼうに高価だ。大手スーパーなどで簡単に手に入るようになったこの時代、『いーしやーきいもー』の声はどうしてなくならないのだろうか。『さおだけ屋』読者が待ち望んだ「さおだけ屋がそうなら、あれはどうなの？」の疑問に明快に答える続編。焼き芋屋のほかに、わらび餅屋と畳屋、お祭りの露天商のビジネスについても収録。

タイトル：「ラジオは死んだ」

要旨：ラジオはダイニングメディアと言われて久しい。しかし、本当にラジオは死んだのか。いま、どうやらかつての若者が復活リスナーとして戻ってきているらしい。しかし、現在ラジオがぎりぎり持っているのは、復活リスナーの力だけではないようだ。現在、一部の若者の間でラジオの魅力が広まっている。復活リスナーと新興リスナー、それぞれがラジオに感じている魅力とは何なのか。そして、これからのラジオはどうあるべきなのかを考える。

タイトル：「03110246」

要旨："03110246"—この数列で、あの日の出来事を思い出す人は、どれくらいいるだろうか。我々は、この数字を忘れかけてはいないだろうか。被災者出身でありながらも、自身は被災していない筆者が、2014 年秋、飯舘村と南相馬市、浪江町請戸を見たまま・感じたままに綴るルポ。自衛隊の支援車両をプラカードを持って応援し続けたきょうだい、全村避難の指示がありながらその場所に残ることを決めた老人ホーム、萱浜地区でまだ見つからない子を探し続ける父…被災した人の言葉には、私たちが生きるうえで忘れてはならないエッセンスが隠されていた。

【例 1】タイトル：「東雲の子供たちは何を見て育つのか」、要旨：「東京、東雲。工業用地に隣接する公園広場には、平日の昼からベビーカーを引いたママ友達の姿があった。地縁的な特徴が徹底的に排されたこのエリアで、子どもたちは何を見て、何を聞き、何を感じて成長していくのだろうか。孤高のタワーマンション生活から、新しい家庭の在り方や子育てについて考察する」

【例 2】タイトル：「ポスト SASPL を考える-若者と政治-」、要旨：「特定秘密保護法に反対す



る学生団体として発足した **SASPL**。デザインへの確固たるこだわり、**Web** を介したコンテンツ配信等、従来のデモのイメージを一年間にわたり若者目線で更新してきた。その彼らが **2014** 年内を以て解散するという。彼らの活動は果たして、誰に、どれほど響いていたのだろうか。そして、音楽や映画について語らうのと同じように、若者が政治について考える日常はやってくるのだろうか」

【例 3】タイトル：「食えてますか、バンドマンの皆さん」、要旨：「音楽不況と呼ばれて久しい昨今。音楽の創作活動を生業にしようと志す人々はかつてない苦境を強いられている。『昼はアルバイト、夜はスタジオライブ』といった典型的なスタイルは依然として根強く残っているものの、新しいキャリアの形を模索するバンドマンが密かに登場している。彼らへの取材を通して、メジャーとインディーの境目が曖昧になっていく音楽業界で、サヴァイヴしていくための術を考える」

タイトル：「誰でもいいから殺したかった！」

要旨：「殺せれば誰でも良かった。」そんな一見身勝手極まりない動機のもと行われる無差別殺人事件が近年何かと話題になっている。しかしそのような凶悪事件の犯人たちは本当に生まれながらの悪人だったのだろうか？彼等凶悪犯罪に駆り立てた背景にあるものとは何だったのか。本書では実際の事件を犯罪心理学だけでなく思春期の心理や家族との関係と絡め日本社会に普遍的に存在する様々な問題にも言及している。

タイトル：『意識高い系』という病～ソーシャル社会にはびこるバカヤロー

要旨：「意識高い系」と呼ばれる若者たちがいる。彼らは日々人脈作りに励み、自己啓発本を読み漁り、そしてそれらの活動を **SNS** や現実世界での友人知人にどこか誇らしげに自慢する。つまり何らかの『なりたい自分像』に向かって生き急ぐように人生を送っている人々なのである。この本では現代の相互監視社会や現代における諸問題から、「意識高い系」が生まれた原因を探っている。

タイトル：「野心のすすめ」

要旨：作家・コピーライターである林真理子さんが自らの半生をもとに、「有名になりたい」「人気作家になりたい」といった大きな目標を達成するための「野心」の必要性を説いている。「さとり世代」・「草食系」などといった言葉が流行る”低め安定”の世の中だからこそ「野心」が必要なのだ、と林真理子さんは言う。

タイトル：「錦織フィーバーから見えてくる、日本人とスポーツ」

要旨 1:今、日本でもっとも旬なスポーツ選手といえば、テニスの錦織圭だろう。4 大大会の一つ、全米オープンではアジア人の男子として初の決勝進出、優勝はならなかったものの準優勝という結果を残した。さらに、年間成績上位 8 人のみが出場できるツアー最終戦にも出場、見事ベスト 4 まで駒を進めた。世界ランクも自己最高の 5 位まで上げ、キャリアハイのシーズンだったといえるだろう。

要旨 2:その活躍には日本中が注目し、メディアも連日錦織のニュースを取り上げるほか、錦織が出場する大会の試合を急遽地上波で中継するなど、まさに「錦織フィーバー」が巻き起こった。

しかしながら、「熱しやすく、冷めやすい」のが日本人である。流行りのものを敏感に察知し、話題になったかと思えばすぐに消えてしまう。そんな日本人にとっては錦織の活躍も流行りのうちの一つでしかないのか。

要旨 3:スポーツを考える上では、大衆(観客)の目は重要な役割を果たす。大衆がどう見るかに

よってその競技の未来は大きく変わってくる。そういった点からも、日本人のスポーツへの向き合い方を考える必要があるかもしれない。また、大衆の目をスポーツに向けさせるのはメディアによるものが大きいことから、メディアの役割も無視できない。

今のところ、錦織の話題は衰えを知らないが、過去にも同じように話題を集め、そしてその後下火になっていったものもある。その事例を挙げつつ、現在の「錦織フィーバー」から見えてくる日本人の「スポーツ眼」を探る。

タイトル：「二丁目の人々」、要旨「LGBTがかつてないほど注目されている昨今、日本で最もLGBTの人々が集まっている新宿二丁目で、どのような人々がどのような経歴、決意を経てどのような生活をしているかに迫る話。自分とは違う（と思っている）人々の生き様を見て、自分とは何かを改めて見つめなおす機会にもなる。」

タイトル：「おんなのこごっこ」、要旨「近頃流行りのいわゆる“男の娘”についての本。女装をするようになったきっかけから、続けている理由を取材し、われわれが知らないその世界での常識、トレンドなどを通して読み解く。」

タイトル：「一人上手」、要旨「今や社会問題にも発展する“おひとりさま”。結婚できないのではなく、結婚しない（と言い張る）理由とは。また、結婚する人としらない人はどこで違ったのか。」

タイトル：「それでもやっぱり女子が好き」、要旨「タカラジェンヌから女優、タレント、アイドル、さらにグラビアアイドルにAV女優まで、女子の愛する女子たちの幅は広がってきた。一見、女性の敵のようにも見える彼女たちを評価する理由とは。」

「仮面ライダーは“仮面ライダー”といえるのか」：現在放送している仮面ライダーは石ノ森章太郎が亡くなられてから作られているものであり、それらの作品は現在で16作品で石ノ森章太郎存命の時の仮面ライダー作品の数を超える。それらは“仮面ライダー”と呼べるものなのだろうか。

「アベノミクスは成功か」：来る12月14日に衆議院解散総選挙が行われる。総理大臣の安倍晋三は今回の解散を「アベノミクス解散」とし、今回の選挙は今後の日本経済に左右されるだろう。アベノミクスの効果を実感している人が少ない中でアベノミクスは成功している経済政策と言えるのだろうか。

「視聴率に意味はあるのか」：現在もテレビ番組の人気度は視聴率で測られることが多い。しかし、現在では録画機能を使う人が多く本当に正しい数字とは言い難い。これで本当に視聴率＝人気度と言っていいのだろうか。そして、本当に正しい人気度を測るためにはどのようにすればいいのだろうか。

## 花は千里を翔る

「クール・ジャパン」以前に世界に広まり、継承されている日本文化がある。それは、茶道・華道といった日本のいわゆる「伝統文化」。どうして伝統文化は海外へ進出し、定着し得たのか？日本人も知らない、世界で本当に受け入れられた日本文化の秘密。

## いぬ端会議

犬の飼い主は、どうして公園で集まるのか？これは日本に限った現象ではなく、海外でも、犬の飼い主同士のコミュニティが形成されている。ペットの犬を通じた人のつながりとは、いったいどういうものなのか？どうして形成されたのか？

## 「キャラ」と「ごはん」の現代日本論

### ー「艦これ」のリアル 「ごちそうさん」のリアルー

2013年のサービス開始後、快進撃を続けるオンラインゲーム「艦隊これくしょん」と、同じく2013年～2014年に放映された連続テレビ小説「ごちそうさん」。どちらも物語に第二次世界大戦が深く関わるが、描き方には大きな相違がある。戦争という史実を、前者はキャラクターを性格付ける重要な要素、いわば「元ネタ」として扱い、後者は料理好きの主婦の視点から「お腹が空く」「家族と食卓を囲めない」というように、誰もが感じる身体感覚で捉えている。

それら対照的な二種類の「リアル」を読み解くことで、現代日本人の現実感覚を探っていく。